

# 収藏品展「歴史で見る新潟市とスポーツ」

小林 隆幸

ラグビーワールドカップ日本大会では、新潟市出身の稲垣啓太選手の活躍に大いに盛り上がりました。今大会を機にラグビーファンになった方も大勢いることでしょう。

新潟市内には、サッカー、野球のプロスポーツチームがあり、スポーツで盛り上がり楽しむ習慣が根付いていまいよ、日本開催のオリンピックが間近に迫ってきました。否応なしにスポーツで日本が盛り上がることでしょう。

そうしたスポーツ熱に後押しされ、今年度の収藏品展では、スポーツに関する資料を選んで、新潟市とスポーツの歴史を振り返ってみます。

## スポーツの始まりと浸透

明治時代を迎え、西洋化とともに進む近代化は、健康な身体づくりにも及びます。先駆けとして学校の学科の中に体操が入られ、教育の場にも体育としてスポーツが定着していききました。明治初期から小学校ではブランコや縄跳びなども奨励され、器具を使用する運動も広まっていたようです。明治二十一年(一八八八)年には新潟区内小学校総合運動会なども催され、運

動の高まりとともに学校では屋内運動場の設置が進められていきました。

四方を水に囲まれた新潟市では水泳の導入も早く、新潟高等小学校では、明治三十二年に古式泳法の「神伝派自然流」を開いた村山正臣を東京から招聘し指導にあたらせました。水泳場は最初、白山堀に設けられました。当館には、寄居浜の海で水泳をする明治末期の写真が残っています。また、水がらみでは明治中期に新潟師範学校や新潟商業学校、少し遅れて新潟中学校で「端艇漕」、いわゆるボート競技が始められました。

大正期には市民にもスポーツが浸透し、競技場などもつくられるようになりました。陸上競技も盛んになり、多くの競技大会が開かれました。戦時中は学生を中心に鍛錬や心身訓練が体育に盛り込まれ、運動会に軍事的な演習なども加わりました。

ここでは、新潟にスポーツが導入され浸透していく明治から昭和戦中期までの状況を、写真を中心に紹介



村山正臣の水泳指導(明治45年)

します。

## 風間栄一と戦後のスポーツ振興

新潟のスポーツを語るうえで欠かせない人物が風間栄一です。昭和十一(一九三六)年のベルリンオリンピックのレスリング選手であった彼は、戦後、競技者として活躍するいっぽう、後進の指導やレスリングの普及に努めました。

引退後も新潟県のスポーツ振興に尽力するとともに、昭和三十九年のオリンピック東京大会ではレスリング日本代表監督として、五個の金メダルを獲得しました。レスリングの普及と若い選手への指導の精神は、風間杯全国高校選抜レスリング大会として今も引き継がれています。



レスリングポーズの風間栄一(昭和9年)

贈された彼の遺品とともに、その功績をふり返ります。

## スポーツの普及と国体・インターハイ

戦後はさらに市民スポーツが盛んになります。スポーツが市民生活に入り

込んでくる中、昭和三十八年には全国高校体育大会(インターハイ)が、昭和三十九年には国民体育大会が新潟で開催されました。その記念品や関係資料が当館にもいくつか収蔵されています。

そうした資料や記念品から、大会に湧いた当時の新潟の様子をみていきます。

## 国際親善とスポーツ

日韓共同開催になった平成十四(二〇〇二)年のワールドカップは、新潟市と韓国ウルサン市にサッカーを通じた交流をもたらしました。両市をそれぞれ会場に少年チームの親善試合も行われ、平成十八年には交流協定が締結されました。

遡って昭和六十三年には、アジア卓球選手権大会が新潟市で開催されました。多くの市民が開催に加わり大会を盛り上げました。スポーツは新潟と外国の都市との友好や交流にも貢献しています。スポーツを通じたこれまでの国際交流の軌跡を追います。

当展の会期は二月十五日〜三月二十二日まで。観覧無料。お待ちしております。

(こばやし たかゆき 副館長)

## 抜け荷発覚

天保六(一八三五)年の村松浜の薩摩船難破による唐物抜け荷(中国製品の密貿易)はなぜ発覚したのでしょうか。一度は代官を欺きおこなったのに。従来、逮捕者の一人、加賀屋専助の手記を唯一の史料として事件の経緯だけが述べられてきました。

「北越秘説」は、抜け荷が江戸などの商人の手に渡ったので露顕したと記しますが、具体的ではありません。

先日、国立国会図書館所蔵「天保撰要類集」をデジタルライブラリーで見ていると、この抜け荷摘発に関する記述がありました。石見(現島根県)浜田の八右衛門が、渡航禁止の竹嶋(現鬱陵島)へ渡った事件の史料です。

竹嶋事件は、浜田藩が背後にいたとの判断もあって、天保七年七月江戸で内密に取調べられます。十一日に寺社奉行井上河内守の屋敷で、八右衛門は「唐物抜け荷なら、薩摩藩が毎年七、八艘に唐物を積み新潟の廻船問屋三右衛門へ着船し、新地の竹松が会津で密売している」と供述します。捜査を担当する寺社奉行、勘定奉行、江戸町奉

行らは十三日に老中久保加賀守へ報告します。老中は、唐物抜け荷は竹嶋とは別件で、本来御勝手方勘定奉行の担当だが、ただちに対処するべきだとし、薩摩船入港時の現行犯逮捕を待たずに、江戸町奉行筒井伊賀守に三右衛門、竹松の召捕りを命じます。

八月十二日、筒井らから老中に結果が報告されます。筒井の同心たちが新潟へ行くと、廻船問屋三右衛門という者はおらず、竹松は病死していました。同心たちは探索を続け、新潟で情報を得たのでしよう、若狭屋市兵衛ほか五人を召捕って江戸へ連れて帰ります。

以上が「天保撰要類集」から判明することです。この後、市兵衛らが村松浜の難船事件を自供し、関係者がさらに逮捕されたようです。

薩摩船の抜け荷を日本海側の船頭は知っていたようです。また、幕府が従来から唐物抜け荷を露顕させたことが、この件を露顕させたようです。私は幅広く多くの資料を読むことの大切さ、面白さを再確認しました。

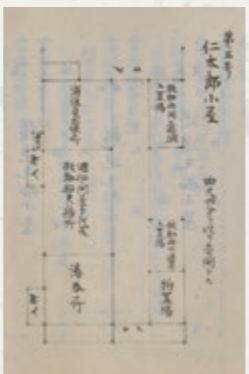
## 収藏品紹介

### 「仁太郎小屋」図(新潟区共有物)目録帳より

明治十一年(一八七八)の「郡区町村編制法」に基づき新潟県でも翌十二年四月に郡区町村の区画が決められました。そしてこれまで新潟町であった場所は新潟区になりました。当館ではこの区の共有物を記録した目録帳を所蔵しています。

この目録は「第一号 遥拝所及公園」以下、「第二号 号砲場」「第三号 仁太郎小屋」「第四号 区会議場物品」「第五号 火葬場及休息所」「第六号 区内共有長屋」を記録したもので、図はこのうち「第三号」に添えられていました。信濃川の河口はたいへん浅く、このため出入港する船は座礁しないように水先案内人の手を借りていましたが、江戸時代からこの役割を担ってきたのが「水戸教」の伊藤仁太郎でした。この仁太郎小屋は新潟港を描いた錦絵や当時の廻船問屋の引札の一部にもよく描かれており、あるいは「新潟港らしさ」を演出する象徴的な図柄の一つであったのかもしれません。

また、この小屋については写真も残っていますが、内部の様子はあまり知られていません。さて、目録によれば小屋は明治



「仁太郎小屋」図

十三年に再建されたもので「平屋造 杉皮葺石家根」という仕様だったようです。また目録には小屋の付属施設として「強進丸舟小屋」が「船見町脇砂浜」に、「魁進丸舟小屋」「迅速丸舟小屋」が「海辺町脇砂浜」にあったことが記されています。こうした船は水先案内のほか難船救助にもあたったと考えられます。この点、図からも「救助舟小道具入置場」といったスペースが設けられていたことがわかります。さらに「廻船問屋手代及救助船夫結(詰か)所」や、共有スペースでしょうか「湯呑所」もみられます。

港口を望んで、みんなでのような茶飲み話をしていただいでしょうか。

(安宅 俊介 学芸員)